

耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-Kouhei.org



皆さん、こんにちは。早いもので十一月。寒くなりました。くれぐれもご自愛ください。かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということ。最近では電子マネーやスマホ決済が普及し、世の中どんどん進みますね。新しい技術や製品が開発され、中高年にとってはついていくのもひと苦労です。さて、この「開発」も仏教用語です。仏教用語的には「かいほつ」と読みます。人間は誰でも仏性(ぶつしよう)を宿しています。その一方、仏性に反するような「欲」や「執着」も一緒に宿しており、仏性に従って生きていくのはなかなか難しいことです。

仏教用語としての「開発」は仏性を「開き発(ほつ)せしめる」ことを意味します。仏性は誰にも備わっており、それを開くことができるか、それを發揮することができるか、それが問われています。仏性を「開き発せしめる」ために、修行をし、仏道を学びます。しかし、人間が人間である限り、「欲」や「執着」から逃れることはできず、成仏する(仏に成る、つまり覚る)のは命が尽きる時です。このように、仏教で用いられる「開発」とは、仏となる性質、つまり、自らの仏性を開き、「覚(悟)り」に至ることを意味する言葉です。

この仏教用語としての「開発」からの転用で、自然や技術を利用して、人間により有用なものを生み出す行為が「開発(かいほつ)」と呼ばれるようになり、一般化していきました。そういう使われ方はかなり古い時代から登場しています。たとえば、中世には既に「新田開発」という表現が登場しました。原野などの未開地を、新しく開墾する際に使われました。明治以降、それがより定着し、戦後の高度成長期には現世的な幸福の代名詞として「開発」優先の考え方が人間を支配しました。仏教用語としての「開発」は、日常生活で使われる「開発」とは真逆ですね。自然を破壊し、人間の豊かさだけを追求する行為が、結果的に様々な災禍につながっています。

一方、日常用語としての「開発」は、むしろ人間の「欲」や「執着」を満たすために自然や他の生物を脅かすことにつながっています。最近、諸外国では、人間と他の生物、自然の万物共生を目指し、貧困や環境破壊、感染症など、あらゆる問題と関わりをもち、物心両面の真の開発(かいほつ)に取り組む「開発(かいほつ)僧」という仏教者が増えていると聞きます。

自然に対して謙虚になること、自然に対して感謝すること、そのうえで他の生物と共存すること、それが仏性を「開発(かいほつ)」する人間の生き方です。今年も大型台風に見舞われ、地球温暖化の影響を感じる年でした。「開発」の意味を熟考したいと思います。

来月はいよいよ師走ですね。ではまた来月、ごきげんよう。

※



第19回「弘法さんを語る会」

末森城と
織田家中の四大合戦
— 信長ゆかりの寺社探訪 —



残席
僅か

11月26日(土) 第1部 午前 10:00 - 11:30
第2部 午後 1:00 - 2:30

予約制 会場: 覚王山日泰寺 大書院「鳳凰臺(ほうおうたい)」



かわら版執筆者 **大塚耕平**
(中日文化センター仏教・歴史講座講師)

がお話させていただきます

お申込み先【事務局】あさい

お申込制
参加無料

052-757-1955

